

児童における自然体験活動プログラムの評価

土屋 幸大 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 清水史郎

キーワード：自然体験活動，児童，評価

1. 序論

遠藤 (2007) は、近年テレビのめまぐるしい普及率、遊び場の減少により、児童の「遊び」そのものが大きく変化していると述べている。

筆者はインターンシップ先の自然体験活動を行っている施設で、自然体験活動中に「おもしろくない」、「退屈だ」などの発言を聞いたり、欠席する児童を目の当たりにした。そこで、平野ら (2011) が開発した「自然体験評価」の調査用紙 23 項目を用い、自然体験活動プログラムの内容に対して、児童がどのように評価を行っているのかについて調査を行うことを目的とした。

2. 研究方法

【被調査者】2014 年 9 月の自然体験活動に参加した小学 5～6 年生までの児童 30 名を対象とした。調査は、自然体験活動直後に行った。

【調査方法】平野ら (2011) が開発した自然体験評価に対する 23 項目から、「みんなと一緒に山登りすることはおもしろいと思う」を除いた 22 項目の質問紙を用いて調査を行った。この質問紙は、「仲間と触れ合う喜び」、「活動に取り組む姿勢」、「冒険活動への意欲」、「自然体験の楽しさ」の 4 因子で構成されている。また、この 4 因子を用いて男女間の比較を行った。

3. 結果と考察

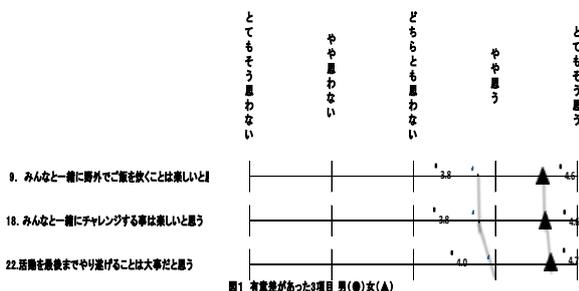


図 1 には、有意差があった 3 項目の「みんなと一緒に野外でご飯を炊く事は楽しいと思う」、「みんなと一緒にチャレンジする事は楽しいと思う」、「活動を最後までやり遂げることは大事だと思う」を示した。

「みんなと一緒に野外でご飯を炊く事は楽しいと思う」では、男子に比べ女子の方が楽しいと思

っていた。これは、普段の食生活において、男子よりも女子の方が家事の手伝いをしていることが理由だと考える。

「みんなと一緒にチャレンジする事は楽しいと思う」でも、男子よりも女子の方が楽しいと思っていた。これは、男子に比べて女子があまり経験しない自然体験を実施した事が影響されたと考える。

「活動を最後までやり遂げることは大事だと思う」でも、男子に比べ女子の方が大事だと思っていた。これは、協調性、責任感など、班の一人ひとりが役割を持って活動していたことや、男子に比べて女子の方が活動への発言や行動が積極的に見られたことが、活動に対してやり遂げるという意欲に繋がったのではないかと考える。なお、他の 19 項目には有意差はなかった。

上記の 4 因子について男女間に有意差はなかった。しかし、「仲間と触れ合う喜び」因子では、男女共に高い得点が見られ、仲間とかかわり合える事に対して多くの喜びを感じていた。「活動に取り組む姿勢」因子でも、男女共に高い得点が見られ、集団生活に対して規則やルールを守ることを心がけていた。「冒険活動への意欲」因子においても、男女共に活動への意欲があった。「自然体験の楽しさ」因子でも、男女共に高い得点が見られ、自然とのかかわりに対して楽しいと感じていた。

4. 結論

自然体験活動プログラムの評価の調査を行った結果、「みんなと一緒に野外でご飯を炊く事は楽しいと思う」、「みんなと一緒にチャレンジする事は楽しいと思う」、「活動を最後までやり遂げることは大事だと思う」の 3 項目で男女間に有意な差が見られた。このことから、男子に比べて女子のほうが、自然体験活動に対する意欲が高かった。

参考文献

平野智之 (2011) 自然体験活動プログラムの「評価法」作成の試み。宇都宮大学教育学部紀要, 61:89-95.

他 17 文献